

突帯文土器の絵画

Primitive Pictures of *Tottaimon* Pottery

小林青樹

はじめに

- ①絵画の資料
- ②絵画の時期と分布
- ③絵画の特徴
- ④絵画の分類と変遷
- ⑤遺跡における絵画
- ⑥絵画の成立をめぐる問題

【論文要旨】

弥生時代早期、突帯文土器段階に抽象的な絵画を有する土器が出現する。分布は、近畿と東海地方に集中し、出現時期は突帯文土器成立期に遡り、その終焉とともに消滅する。絵画の起源は、縄文系土器文様の部分的模倣とその変容の可能性が高く、器面における非連続的・非対称的展開や、再現性の欠如など、同時期の東日本系の縄文土器や前段階の土器様式との間に隔絶性があり、独自の原理に基づく象徴的な絵画を成立させた。絵画の成立の背景には、縄文晩期後半における東日本と西日本の縄文集団間の相互交渉における関係性の変化があった。すなわち、縄文晩期前半から中葉にかけての時期に近畿地方を中心とする西日本では、文様で飾られた浅鉢などが交換材としてたらされ、逆に東日本においてもわずかではあるが西日本系土器が散見されるなど、広域的な相互関係が成立していた。これに対し、晩期後半の突帯文土器成立期になると突然こうした関係性が崩壊し、一時的な断絶状態が生じる。この関係の精算と新たな関係構築に際し、東日本縄文系土器文様のみを取り込もうとする状況のなかで変容をとげ、絵画が成立したと考えた。突帯文土器様式においてこのような絵画・記号が保持されたのは、農耕社会が形成されていく過程において急速に変容していく社会内部の矛盾等を解消し統合するために、集団のアイデンティティを再確認するための象徴的な「第2の道具」の一つであったからである。